石川島記念病院

症　例　概　要　患者氏名：　Y.S様　（70代前半　男性）

病名：左脳梗塞

入院期間：令和6年11月　～　令和7年1月

経過：令和6年11月上旬自宅にて構音障害と歩行障害が出現し当院外来を受診、MRIにて急性期の左脳梗塞と診断され前医へ救急搬送、入院となった。抗血小板療法を主体とした急性期治療開始となった。顔面を含む右上下肢運動麻痺と失語症等の高次脳機能障害を呈していたため当院地域包括ケア病棟へ入院となった。令和7年1月下旬自宅退院を果たした。

内　　容

元々、病院嫌いであり通院の自己中断もあったことから、奥様は退院後の通院について大変心配されていた。入院当初は離床やリハビリに対する拒否が強く、自室での臥床時間が長く積極的な離床が図れずにいた。また、帰宅願望もあり長時間に渡りエレベーター前で待ち構え離院を図る行動や制止するスタッフへの暴力行為もみられた。認知機能低下、病識低下は著明であり、離床時には常にスタッフの見守りが必要な状態であった。家族が病院側を気遣い、連れて帰るといった提案もあったが、未だ治療が必要な段階であった。

そのため、主治医へ面会時間を延長する特別許可をとった。その他に薬剤の調整も行われた。ご本人様が落ちついて入院生活を送れるよう奥様が毎日13時から18時頃まで付き添いをしてくださった。夕方頃からの不穏によって奥様が帰宅を渋ってしまう場面も見受けられたが、看護師を中心にスタッフが付き添い、安心して帰宅していただけるよう介護負担が増大しないようフォローを行った。当院は地域包括ケア病棟へ病棟転換が行われたが、高次脳機能障害や失語症も呈していたため、主治医の指示のもとPT・OT・STが介入しリハビリを9単位/日実施し、身体機能の改善と認知機能の向上を図った。9単位/日のリハビリに加えて、1日2回の集団体操へも参加していただき離床時間の拡大を図った。奥様にはリハビリの様子も見学していただき、退院後を見据えてご家族と一緒に階段昇降練習や屋外歩行練習を行った。リハビリスタッフは自宅退院へ向けた福祉用具やサービスの提案を行った退院前カンファレンスの機会を設け、ケアマネージャーも同席のもと環境調整を行った。退院までに必要な環境やサービスを調整できるようMSWが取り次ぎご本人が安心して安全な生活が送れるよう多職種とご家族で協力した。また、同時期に入院中の患者さんが毎日面会に来られる奥様を励ます様子もあった。

徐々に落ち着きがみられ、お昼頃には窓の外を眺めながら奥様が面会にくることを楽しみにされる様子もみられるようになった。リハビリも拒否なく介入できるようになり笑顔も多くみられるようになった。退院

時には自室で落ち着いて過ごせるようになり、無事自宅へ退院することができた。入院時に聞かれていた通院の心配も、奥様付き添いのもと、通院されている姿をみることができた。

多職種とご家族が『OurTeam』となり献身的なサポートをしたことで自宅退院を果たした症例であった。